

Saidai Concierge

サイダイ
コンシェルジュ

<http://www.saitama-u.ac.jp/>



巻頭特集

世界に飛び立つ埼玉大生

留学経験学生インタビュー

.....01

ラボ探訪 -Welcome to my laboratory-

大学院 人文社会科学部 研究科

遠藤 環 准教授03

大学院 理工学研究科

塚原伸治 准教授04

日本で、世界で
活躍する埼玉大生!05

卒業生紹介07

活躍する卒業生からのメッセージ

株式会社富士薬品 企業戦略部

坪井 一朗さん

サークル紹介 -PASSION-08

二次元バンドサークル AKUTO

第67回むつめ祭

むつめ祭常任委員会

委員長 吉田 優志さん09

学長のページ

対談 山口学長 梶田隆章先生10





巻頭特集

世界に飛び立つ 埼大生

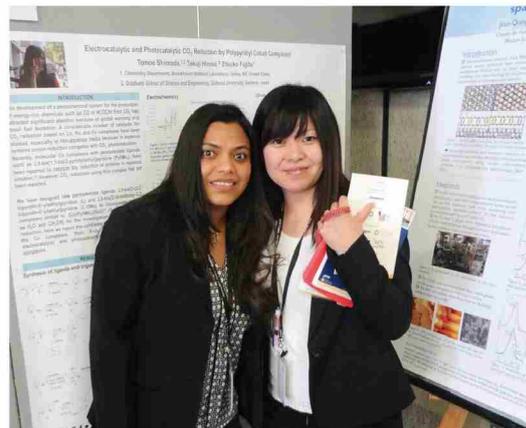


下田 知枝さん

Tomoe SHIMODA

大学院理工学研究科博士前期課程2年
青森県立三沢高等学校出身

第2期 2015年8月～2016年7月に参加
ニューヨーク州ロングアイランド ブルックヘブン国立研究所



長期留学の夢がかなった、トビタテ。

私が丸1年間、トビタテ!留学JAPAN制度を利用して行ったのは、ニューヨーク州ロングアイランド ブルックヘブン国立研究所。米国エネルギー省管轄の、日本でいえば理化学研究所のような研究機関です。周囲には人家もコンビニもない、街に出るのにクルマでしか行かないような立地で、広大な敷地内に物理棟や化学棟などいくつもの建物がある大きな施設でした。

学部3年生のときに約2週間、フィリピンに留学留学したのですが、短期間なのでとても物足りない気持ちを抱えていました。いつかは



長期留学をと思い、指導教官にも「行きたい」と常に訴えていたときのトビタテの話。一も二もなく飛びついたのはよいのですが、私がイメージしていた、海外の大学に通って、勉強しつつキャンパスライフを楽しむ、といった留学とはまるで違うものでした。先生に言わせると「もう大学院の中間点にいるのだから、勉強ではなく研究でしよ」と。

この留学が、研究者の道を歩む マイルストーンになった。

研究所生活がスタートしました。大学留学と違いスタートアップの語学研修期間はありません。英語はできることが前提、いきなり360度英語の渦に放り込まれ、「すみません、もう一回お願いします」「もう少しゆっくり話してください」の繰り返し。とにかく積極的に話すことでなんとか克服しました。もうひとつ、さあ実験しようとして解析機の前に入ったとき呆然としました。見たことも触ったこともない機器で操作方法がまったく分からないのです。このようにすべてがゼロからのスタート、よく頑張ったと自分をほめてやりたいと思います。

研究テーマは『金属錯体触媒を用いて二酸化炭素を違う物質に変えてエネルギーとして再利用する』。埼大の研究室で合成した化合物をブルックヘブンにもっていき、解析を行うことが留学の主目的でした。1年間の成果を論文にまとめてはいますが、まだ公表前なので詳しい研究内容をここでは言えません。この研究が何に役立つのかだけお話しておきます。二酸化

炭素は地球温暖化の原因物質のひとつと考えられています。二酸化炭素を違う物質に還元し、それがエネルギーとして再利用できるとしたら、地球温暖化の防止になるし、新たな自然エネルギーの創出にもつながる可能性がある、というものです。いま世界中の研究者がさまざまな錯体をつかって、さまざまな条件での実験・解析を行いそのデータを持ち寄って最良の還元反応を探っています。

次は水の酸化反応にチャレンジする予定ですが、展望としては日本で博士号を取得後、米国に舞い戻って、地球環境やエネルギー問題解決に取り組む研究者として、最先端の研究を続けたいと考えています。

行けない理由を考えないで。 行く最良の方法を見つけよう。

この留学で得たことは、まず研究者として実験的なスキル面と英語でのコミュニケーション力がアップしたこと。また、タイムマネジメント法も欧米式仕事環境のなかで身につけられました。ガラガラと長時間行うのではなく、ピシッと時間内に集中してやる、この効率の良さは本当に見習うべきですね。

最後に、これからトビタテに限らず留学を目指す人たちに言いたいのは、行きたいのなら、マイナスの理由をあれこれ考えず、とにかく飛び出しましょうの一言です。違う世界が広がり、本当に価値のある経験ができます。



文部科学省が民間企業の支援を受けてスタートした「トビタテ!留学JAPAN」。意欲と能力のある日本の若者が、海外留学するための一歩を踏み出すための後押しをするもので、これまで2年間で、大学・高校生約2,000人が92カ国に留学している。埼玉大学からもすでに11人参加し、それぞれの目的を果たして帰国後の勉学や進路に役立たせている。今回は2015~16年にかけて留学を経験した2人に留学の様子を話していただいた。



第3期 2015年8月~2016年5月に参加
アメリカ・イリノイ州 イリノイ大学スプリングフィールド校に交換留学

目的と現地行動計画を提出し、審査を受ける「トビタテ!留学」

留学は埼玉大に入学する前から必ず1回は行くと決めていました。たまたま「トビタテ!留学JAPAN」2期生として留学を経験した高校の先輩から勧められ、トビタテに応募しました。トビタテは通常の交換留学とは一線を画していて、わりと厳しい審査があります。審査プロセスは、書類選考→面接・プレゼンテーション→ディスカッション。書類選考の提出書類は数も量も多く、なかでも重要なのが留学先での行動を細かく示した計画書です。

私は今回の目的を「日本人学生がアメリカに留学する意義を心理学と教育学の両側面から考察し、これからの日本人の留学生数増加に貢献する」ことと定め、それを達成するために3つのチャレンジを実現する計画を立てました。

1. 学修:イリノイ大学スプリングフィールド校で、少人数のディスカッション中心の授業を履修し、徹底的に英語力を身につける。
2. フィールドワーク:シカゴ、ニューヨーク、ロスアンゼルスでの学校訪問を行い、地域社会を含めて留学生にどのような支援が行われているか調査する。
3. ボランティア:プロジェクト・ラブ・オールという日本人学生団体に参加し、ボランティアを通して、アメリカ文化が日本人学生にどんな影響を与えているのか調査する。

語学だけではない、本当に多くの果実を受け取った日々。



英語に関しては最初の半年、本当に苦労しました。何を言っているのかまるで分からない、だから何も答えられない、ただうなづくだけです。しかし「習うよう慣れる」とはよく言ったもので、英語しかない環境に身を置き、間違ってもいいからとにかく話すことを繰り返してゆくうちに、徐々に会話できるようになりました。

3都市の学校訪問は地域差が如実に表れ興味深い調査ができました。ロスアンゼルスは地域全体のアジア人への生活環境支援が行き届いています。だから安心して留学を勧められる。ニューヨークは日本人だからといって特別な支援はしない、どこの国からだろうと平等に見る姿勢です。こうなると行く側の問題ですね。覚悟して行きなさいと。

プロジェクト・ラブ・オールはシカゴにある学生団体で、東日本大震災で罹災した日本の学校と連携して、テニスレッスンで得られたお金を定期的に日本に送るボランティア活動を行っています。実際3.11を経験していないのに、遠く離れているからこそ忘れずに支援し続

ける人たちがいることに深い感銘を受けました。日本にいても3.11を忘れかけている自分がとても恥ずかしく思えた日々でした。

世界を知り、自分を見直すためにも、留学しよう。

トビタテ!留学の9カ月間、本当にかげがえない経験ができたと思っています。最初のうちは語学力をつけ、米国の教育や留学生に対する支援状況を見るのが目的でした。それらが全うできたことはもちろんですが、何よりこれからの人生の大きな糧になったのは国際的な異文化交流ができたこと。これですごく成長できたと感じています。頼る人もいない環境で、「私」というものを客観視できたのだと思います。傲慢だった自分を自覚し、周りに感謝する気持ちも自然と育まれました。帰国して友人から「お前、やさしい顔になったな」と。

これから教員を目指しますが、高校の英語教師になって生徒に自分が留学で得た経験や学んだ価値観を伝えて、どんどん生徒を海外に送り出したいです。





遠藤 環 Tamaki ENDO
大学院人文社会科学部 准教授

◎経歴 1999年 京都大学法学部卒
2004年 京都大学大学院経済学研究科
博士後期課程単位取得退学
2003年6月 タイ・チュラーロンコーン大学
～2005年6月 社会調査研究所客員研究員
2004年 日本学術振興会特別研究員 (PD)
～2007年 (京都大学東南アジア研究所)
2007年 博士(経済学)取得
京都大学東南アジア研究所研究員
2008年～ 埼玉大学経済学部講師を経て現職



複雑に変化するアジアの都市を研究する。

ここ数年続いている研究のメインテーマは、アジア新興国のメガ都市、タイのバンコク、中国の上海、バングラディッシュのダッカといった都市の発展と変化のダイナミズム、またそこに暮らす人々、特に都市下層民の労働や生活の実態、それらに対する行政政策の変遷と実績の調査・分析です。なかでも人々のリスク対応やコミュニティの役割に注目してきました。また公式統計では十分に把握されていないインフォーマル経済とされる職種(屋台や廃品回収人)の実態や、工場労働が、グローバルバリューチェーン(価値の連鎖)にどのようにリンクしているかなども並行して研究しています。

これらアジアのメガ都市は、いま、グローバル都市の機能を持つほどに発展していますけれど、先進国のメガ都市が長い時間をかけて発展したプロセスを、圧縮した短い時間で成し遂げているため、先進国が抱えている現在の課題と途上国が発展する過程で抱える課題両方が同時に現れる現象が起きています。とても複雑な入れ子構造で、これまでの都市研究の範疇では捉えきれないため、さまざまな分野の研究者仲間とも共同して研究を進めています。



世界最先端の都市研究は、アジアにあり

都市研究のテーマとして、アジアほど面白いものはない。

たとえば現在の東京が抱える問題はどんなことが挙げられるでしょうか。人口の極集中、少子高齢化、若年層の労働環境(非正規労働者の増加など)、3K労働の従事者不足、などなど…。高度経済成長を経て約半世紀かけて発展してきた結果、生れ出てきた問題の一部です。いまこれらの問題が新興国のメガ都市でも発生しています。しかも「圧縮した短い時間」、つまりここ10数年の間に起こっています。また、すでに東京にはありませんが、途上国に多い、いわゆるスラムといった都市下層民のコミュニティが依然として存在し、生活のベースとして機能しています。

都市の発展と変化のなかで都市下層民はどう生き抜いてゆくのか、またこれらの都市の持続可能な発展のモデルはあるのか? 研究の題材としてこれほど面白いものはありません。

これまでタイ・バンコクを主なフィールドに研究してきましたが、最近では東南アジアのメガ都市の比較調査を、「生産・消費活動、ライフスタイル」、「台風・洪水など災害に対するインフラ整備と貧困問題」、「リスクとウェルビーイング」といった、いくつかのテーマの共同研究として進めています。

世界人口の約半分が都市に住み、その多くがアジアに住んでいます。アジアのメガ都市を研究することは、世界の縮図を見ているのと同義だと言っても過言ではありません。世界の国際都市が直面している課題が圧縮して現れているのです。

いま欧米では中南米やアフリカの都市研究が進み、グローバルネットワークを通して世界に発信されていますが、残念ながらアジアの都市研究はまだ認知度が低いと言わざるを得ません。アジア経済は世界経済の重要な位置を占めるようになってきました。それと同様に、今後はアジアの都市研究を育て、グローバルネットワークのなかで発信し、都市研究の最先端をいく存在を目指したいと思っています。

「どうなるんですか?」と問う前に、あなたたちは「こうしたい!」を考えてほしい。

「この先、アジアはどうなるのですか?」と聞いてくる学生がたまにいます。どこかで他人事なのです。そうではなく、学生には客観的に既存の理論やデータを検証する力と、今後の展望について自ら考える思考力を持って欲しいと思います。そのために学生へのフィードバックを大切にしています。卒論なら必ず3稿まで書いてもらう。いまの自分の到達点を見極め、次の課題を見つけ、自分で向き合い解決する能力をつけてもらうためです。このスキルは社会に出てからとても重要な武器になります。日本やアジアの未来をつくるのは自分だ、くらしいの自覚と主体性をもった人材に育ててほしいです。

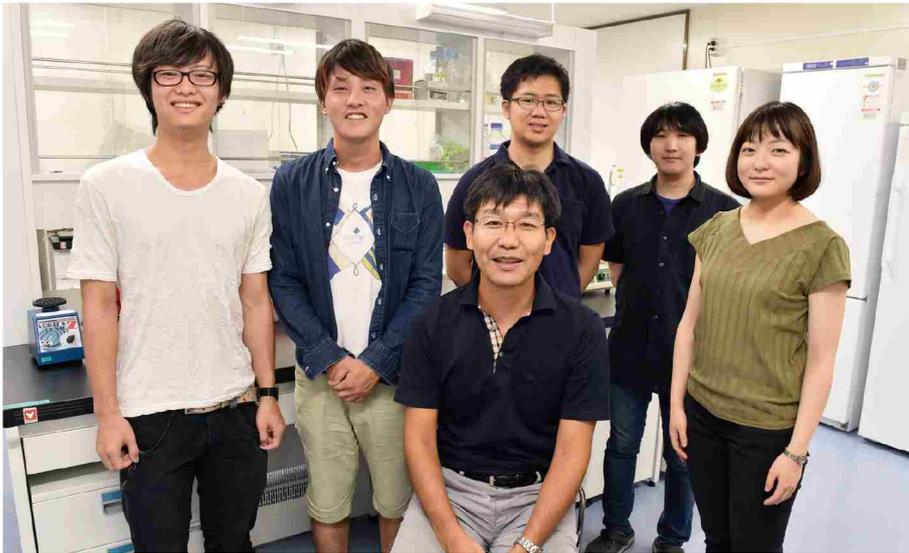


一度、外から日本やアジアを見ると、視界が変わる。そんな学生を一人でも多く育てたい。

グローバルタレントプログラムのディレクターなどを務めた関係で、海外研修を行う授業を通じて意欲ある学生たちにもたくさん出会ってきました。ちょうど今年の夏からも現2年生が海外留学に出発しましたが、好奇心旺盛でさまざまなことに挑戦していく姿を見ながら、こちらが元気をもらっています。彼ら、彼女らの可能性を広げ、適性を引き出すこと、それが教育者としての務めかなと思っています。

理学部／生体制御学科 塚原 伸治 研究室
Welcome to my laboratory

ラボ探訪



塚原 伸治 Shinji TSUKAHARA

大学院理工学研究科 戦略的研究部門ライフ・ナノバイオ領域 准教授

◎経歴

1994年 名古屋大学農学部卒業
1999年 名古屋大学大学院博士後期、生命農学研究科修了
1999年 早稲田大学人間総合研究センター 助手
2002年 神戸大学大学院自然科学研究科 助手
2005
～2009年 (独法)国立環境研究所 主任研究員
2006
～2009年 千葉大学大学院薬学研究院 客員准教授
2010年 埼玉大学



「脳とホルモンと行動」をキーワードに、
脳と性の関係を探る。

地球上にはさまざまな生物が生きています。そしてほとんどの生物が種の保存・継承のため生殖を行い、次の世代へと命をつなげています。その生殖活動において重要なファクターは雄と雌のふたつの性があることです。雄と雌は、生まれながらに性が決定づけられ、例えばひとなら男性として、女性として育てられ成長していきます。

ところが、遺伝学的にどちらかの性をもって生まれ、身体的にもその性の特徴を有しているにもかかわらず、どうしても身体と心の性が一致しないひとが存在します。または同性しか好きになれないひとが存在します。ごく最

近、社会的にも認知されてきた、LGBT(レズ、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー)といったセクシャルマイノリティのひとたちです。

遺伝子的に性別が決定され、生まれてからもそのまま男らしく、女らしく生きてゆくというのがこれまで一般的な説でしたが、それだけでは説明できない現象が現れているのです。どこかにスイッチが切り替わる要因があるのではないかと。その性分化の神秘を究明するのが現在の私の研究テーマです。身体的特徴以外の男性・女性らしさを表現するのは脳の指令によるもので、脳はさまざまなホルモンの作用で指令を出したり出さなかったりしています。そこで私は「脳とホ

男と女の行動性差の不思議を脳とホルモン作用で解明。

ルモンと行動」をキーワードに、いつ、どんなホルモンが分泌され、脳のどこに働きかけたとき、どのような行動・現象が起こるのかを実験・分析し、生命科学としての性分化のメカニズムを探っています。

ひとすべてが、より良い生活のできる社会づくりに貢献したい。

もともと私は農学部畜産学科で繁殖学を研究していたのですが、早稲田大学に助手として迎えられたときに、性分化研究にのめり込むきっかけをいただきました。大人の雄ねずみの脳のある領域の一部を切除すると雌の行動を起こすという研究です。つまり脳のなかにはお互いの異性の機能を司る部分があり、普段は異性の行動を隠し抑え込んでいるのが、脳のある一部が壊れると、それが目覚め、異性の行動を発現してしまうというものです。この実験は外科的必要な要因でつくり出されたものですが、私はホルモンの作用に着目しました。

ラットやマウスを使った実験で最近までに分かってきたことは、まず最初に発達途上の未熟な時期に脳構造の性差形成が起こることです。男性ホルモン(精巣から分泌されるアンドロゲン)に脳がさらされると「男(雄)脳」になり、さらされなかった場合「女(雌)脳」に分化するのです。これが脳構造における雄雌を分ける第一歩。何らかの要因で男性ホルモンが十分に届かなかった場合、遺伝的に雄でも脳構造は雌脳になってしまうこともわかっています。

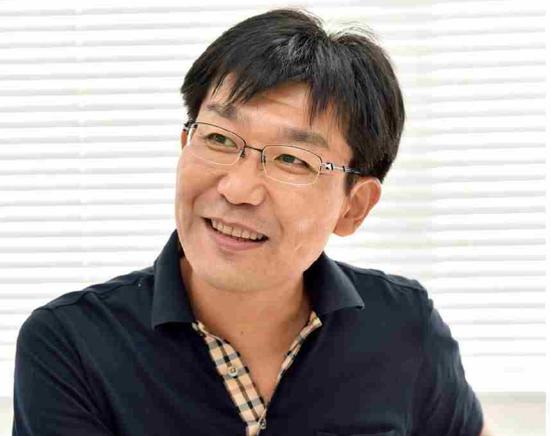
このように自分ではコントロールできないホルモンの作用で雄と雌が分かれ、行動も決定づけられるということが徐々に解ってきました。十分な知見はまだありませんが、ひとの脳にも当てはまるかと考えられています。この研究成果の発信により、セクシャルマイノリティへの社会的理解を深め、セクシャルマイノリティも含めたひとみんなが安心して、より良い生活ができる社会づくりに貢献することを目標に日々研究に取り組んでいます。

埼玉はチャレンジできる
優秀な中小ベンチャー企業の
集まり。

埼玉大学の魅力は、理系の視点で見ると、技術開発力では大企業に決して負けていない中小ベンチャー企業のような立ち位置にあることだと思っています。誰も見向きもしない、でも面白いという研究をやらせてもらえる。無謀を許すのではなく、チャレンジできるだけのポテンシャルがあるからなのです。誰もやっていないことを世界に先駆けて研究したいチャレンジ精神と独立心がある学生には相性の良い大学ですよ。

予測が外れるのは悔しい。
がまん強く、頑固に、
当たるまで続けるだけ。

実験は予測を立て、実験プランを立て実行します。予測が外れることのほうが多いのですが、それは間違いだけれど、間違えた分だけ成功の道筋にめどが立ってくるわけです。1回の失敗で10個くらい次の選択肢が考えられ、一つひとつに予測を立て実験を繰り返してゆく。あるとき、予測した理屈で説明がつく結果が現れる。我々研究者が達成感を感じるのとはそんなときですね。





Saitama University Congratulations!

学術研究や課外活動の場で、埼大生が大活躍しています。
埼玉大学に入学して、先輩たちを手本として頑張ってみませんか？

SEARCH 藤澤 匠

多くの子どもに
書道の楽しさを教えたい。
少しでも理科嫌いの子どもの
減らしたい。

藤澤 匠さん Takumi FUJISAWA
教育学部理科専修 3年 / 東京都立竹早高等学校出身

第68回毎日書道展かな部門 II類 U23
毎日賞 受賞



受賞のよろこびをお聞かせください。

受賞作は旅の俳句を2首書いて応募しました。残念ながらこの誌面ではご紹介できないのですが、「たび」という文字を違う形で書いてアピールしました。得意な「かな」で受賞できたことはうれしいし、これをきっかけにさらに由緒ある展覧会の受賞を目指して腕を磨いてゆきたいと思っています。

書道を始めたきっかけは？

初めて教室に行ったのは小4のとき、妹の書道教室通いの付き添いでした。付き添いですからやることもなくぼうっとしていたら、先生が君も書いてみないかと。そのとき墨を擦ったのか墨汁だったのかは覚えていないのですが、筆を動かすと白い紙に黒い文字がすうっと浮き上がる、上手い下手ではなく、そのコントラストの鮮烈さに子ども心に感動したのです。それから妹と一緒に通うことになりました。

小中高とずっと週1で続けてきて、埼大ではサークルに入らない代わりに、書の道を究めようと週2回に教室通いを増やして練習に励んでいます。

書道を続けるモチベーションは何ですか？

小さいころは昇段を目標にしていたときもありましたけれど、いまはあまり段位にこだわりはなく、書道展に出展して入選を目指す方向に向いています。名を遺せばいいなと。

現在進行形での目標は「教授」位の取得です。師範の上の

位で書道界の最高位です。年1回1月に試験があるのですが、その前、11月までに50の課題を提出する予備試験を通らないと本試験を受けられません。いま課題制作と中国の古典や日本書道史を読んでの受験勉強で大忙しです。

書に対するこだわりや流儀はあるのですか？

必ずこだわって入れたい文字はありますね。流儀、自分の形というものはないです。書道にも時代の流行みたいなものあって、「はね」、「はらい」、「つなげ」方が微妙に変わっていくのです。未来永劫同じではない。私はいいなと思えばすぐ取り入れます。そういった教科書はないので、展覧会をたくさん観て、自分で感覚を磨くしかないですね。

将来のビジョンは？

また、最後に後輩のみなさんにメッセージを。

埼大入学の当初目標である、中学校の理科の先生を目指しています。身近な科学を教えて理科嫌いを少しずつ減らしてゆきたいと思います。また、並行するかもしれませんが、自分の書道教室をいつか開きたい夢というか目標も持っています。

埼大の魅力は、学生の気質がのほほんとしていていいですね。なんとというか尖ったところがなくて居心地いいですよ。



SEARCH 鈴木 雄大

生活や環境をよりよくするために、
目に見えない分子の性質を
解き明かす。

鈴木 雄大さん Yudai SUZUKI

大学院理工学研究科 化学系専攻応用化学コース博士前期課程
茨城県立古河第三高等学校出身

第32回化学反応討論会
最優秀ポスター賞 受賞



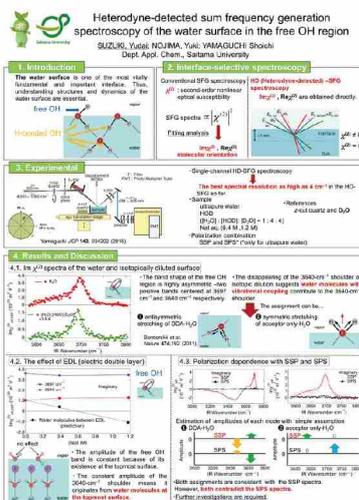
どのような学会で発表されたのですか？

化学反応討論会は、化学系の研究者が一堂に集まる国際学会で、どちらかというと物理に近い理論系の人が多い学会です。講演で理論系の人のお話を聞いても、量子力学とか、私にはなかなか理解できませんでした。私は実験を主にやっているのですが、実験家ならではの理論の人にも解るような発表を心がけました。

ポスター発表というのは、壇上で発表するのではなく、講堂のような会場にいくつかのブースが区切られていて、そこにある私のブースに立ち寄っていただいた人に、研究の説明・発表をする形です。

発表された研究内容は？

ひとことで言うと、水の界面を調べる研究です。水の分子H₂Oがどのように集まって液体の水を形づくっているのか、界面を構成する分子の並びや構造を分子レベルで解き明かす研究です。界面というのは簡単に言えば「境界」のことで、例えば水と油は一緒に容器に入れても混ざりあいません。水の分子と油の分子とでは構造と性質が全く違うからです。



水や水溶液の界面を、レーザー光を当て、発生する光を見ることが分子が上とか下とか、どの方向に向いているか、その法則性を調べる研究です。

水や水溶液の界面を、レーザー光を当て、発生する光を見ることが分子が上とか下とか、どの方向に向いているか、その法則性を調べる研究です。

その研究で期待されている効果とは？

水は地球にあふれているし、身体も水が多くを占めています。分子がどうやって集まっているかを調べることは基礎研究であり、学術的にはすごく重要な領域なのです。いまスーパーコンピュータを使って、PCのなかで水をたくさん作って計算することができるのですが、実験系でやると違う結果が現れることがある。100%一致した見解は現れていません。どこにでもある水なのに解っていないことがとても多いと思います。

効用としては、薬がどうやって細胞の中に入っていくか、オゾン層破壊が雲の表面でどのように起こるかなど、境界があるところなら生体内でも自然環境でもいろいろ応用が効きます。

実験で達成感を感じることは？

実験は、こうなるであろうと予測を立てて行いますが、予測通りにならないことのほうが圧倒的に多いものです。でも、予測とは違うけれど新たなデータが出て、新しいことが解りますから、それはそれで重要なこと。ガッカリはしません。あまりにうまくいかないときは、切り替えも必要ですね。実験方法は変わらないので、予測のプロセスが違うのだからと、いろんな文献を読んで、新たな考え方を取り入れます。そこでピンポイントが出ればやった!となります。

最後に研究の今後と埼大の魅力をお聞かせください。

これまで界面で発生する光をそのまま測るだけだったのですが、別の光も同時に当てることで光の干渉によって新しい情報を引き出すことができます。このような新しい計測技術を使って、これまで解っていなかった未知の領域に踏み込んでみたいですね。

埼大の魅力は、全部の学部がーか所に集まっていることですね。理学部の友人や先生に話を聞いたり実験機材を借りたりすることが数分歩くだけでできてしまいます。和光市の理化学研究所にも近いし、立地的にどこにでもすぐに行けるのは研究者にとってメリットですよ。

活躍する卒業生からの メッセージ

THE MESSAGE
FROM
A GRADUATE

株式会社富士薬品
企業戦略部

坪井 一郎

Ichirou TSUBOI

PROFILE

茨城県石岡市生まれ
 2010年3月 茨城県立
 土浦第一高等学校卒業
 〃 4月 埼玉大学工学部
 応用化学科入学
 2014年3月 同卒業
 2014年4月 株式会社富士薬品入社
 経営企画部配属
 2015年11月 企業戦略室異動
 現在に至る



興味のあることの学びは面白い、 面白いからさらに学ぶ、 可能性がどんどん広がる。それが大学の学修。

企業戦略部では、どんな仕事をされているのですか？

当社は医薬品の研究開発から製造・販売まで幅広く展開する「複合型医薬品企業」です。企業戦略部は富士薬品がさらなる成長を目指すために、全社戦略を立案・実行する組織として設立されました。そこで私は、当社が成長戦略のひとつとして掲げるM&A（他企業との資本・業務提携）の業務に携わっています。この業務は幅広い知識を必要とするため、社会人となったいまも日々勉強の毎日です。また、刻々と変化する業界の情報収集も怠ることはできません。

当社は企業成長や事業拡大の手段としてM&Aを推進していますが、その一方で提携先企業にとっては事業承継問題の解決や成長に必要な投資資金獲得に繋がります。このようにM&Aは、双方企業のニーズが合致した際に初めて成立するものであり、その可能性を模索することに非常にやりがいを感じています。また、企業間の提携にはタイミングが非常に重要となるため、そのタイミングを逸することのないようスピード感を持って業務に取り組んでいます。

首都圏の一角という位置づけの、さいたま市にある埼玉大学は、都心にある大学と比べると圧倒的に緑が豊富で、四季折々の植生が楽しめます。とくに樹木・草花に興味のない学生でも、授業の合間の移動や休み時間に、無意識にそこにいるだけで癒されリフレッシュできます。正に私がそうでした。とはいえ田舎ではなく、大宮、池袋などにも近い。その絶妙なバランスがよかったですね。



富士薬品に就職したのは？

両親が薬剤師であることから、物心ついた頃から医薬品は身近な存在でした。それで自然と医薬品に興味を持ち、中学生の頃には医薬品に関わる職に就きたいと考えるようになりました。長寿が当たり前ようになった現在、一生のうち一度も医薬品のお世話にならない人は極めて少ないと思います。人々の健康に貢献する医薬品業界に通じる知識を学びたいという考えから、埼玉大学工学部応用化学科に進学しました。

医薬品業界にターゲットを絞った就職活動の末、富士薬品の事業展開の幅広さ・奥深さに魅力を感じ、入社を決めました。この企業であれば、人々の健康に貢献できると確信があり、社会貢献にも繋がるものと考えました。

後輩たちにメッセージを

埼玉大学では基幹科目であった化学を始めとして、非常に多くのことを学びました。特に、実験で培った仮説・検証を繰り返して答えを導き出すスキルは、現在の仕事に大いに役立っています。仕事は答えを誰かに教えてもらい覚えるものではありませんから。

高校生のみなさんには、好きなことを好きなだけ学んで欲しいと思います。好きなことだと覚える、面白くなってさらに学ぶ、どんどん可能性が広がっていくはずですよ。その学びの場として、埼玉大学には最適な環境が整っています。5つの学部の中には、きっとみなさんが興味を持てる学びが見つかると思います。

Circle introduction

サークル紹介

二次元系バンドサークル

AKUTO アクト

ライブでの感動的な
盛り上がりがたまらない。
観ると弾きたくなる。



代表

新井 要太

Youta ARAI

教養学部3年
埼玉県立熊谷高等学校 出身

Q どのような楽曲を演奏するのですか？

A 『二次元系バンドサークル』と言っているように、主にアニメの主題歌や挿入歌、いわゆるアニソンをコピーして演奏しています。ほかには初音ミクで有名なボーカロイド(ボカロ)ソング、ウルトラマンシリーズなど特撮番組の曲、ゲーソン(ゲームの主題歌など)、声優をレパートリーにしています。とくにオリジナル曲は持っていませんけれど、TVやネット、ゲームでみなさんがどこかで耳にしている楽曲が必ずあると思います。いま会員が約60人で、22バンドを編成しています。ボカロが得意なバンド、ゲーソン専門のバンドなどいろいろな特長をもったバンドがひしめています。「私はこのアーティストの曲をやりたいから、誰か一緒にやらない?」と一人が手を挙げ、やりたい人が集まってユニットを組むので、ほとんどがかけもちでいくつものバンドに参加しています。演奏はライブハウスを借りて行い、今年は例年になく多く、ほぼ毎月やっている感じですね。

主な
年間活動

4・5月 新歓ライブ	11月 むつめライブ(むつめ祭)
7月 ミニライブ	1月 1月ライブ
8月 夏ライブ	2月 冬ライブ
9月 合宿(長野県)	3月 OBライブ
10月 交流ライブ(現役・OB合同)	

Q どんなメンバーが集まっているのですか？

A サークル名「AKUTO」の由来は『オタク』のアルファベットOTAKUのアナグラムです。オタクとひとことでもどんなところに傾倒するかで分類されると思いますが、AKUTOはアニメと音楽演奏がキーワードになっています。アニメ好きで観る、聴くだけでは飽き足らず、自分で演奏したいと思って入部する人が100%。でも楽器経験者は半分もいません。未経験でも練習を重ねることで1年もすれば堂々と人前で演奏できるくらいになります。練習場所やライブ会場としてお世話になっているライブハウスの人が面白いことを言っていました。「AKUTOのメンバーはアニメが好きで入ってきて、バンドマンになって出ていく」と。これはすごいほめ言葉だと思います。逆パターンで、曲は聞いたことあるけどアニメは観たことがないという、音楽から入ってアニメも好きになる人もいます。どんな形でもAKUTOはウェルカム。演奏したいという気持ちだけあれば充分です。一度でもライブを聴きに来てくれればその楽しさをわかってもらえると思います。





第67回

埼玉大学 第67回むつめ祭

埼玉大生の、埼玉大生による、 埼玉大生と地域のための『むつめ祭』

第67回むつめ祭
祭りはバランスよく
～主菜・副菜・むつめ祭～

日時 11月24日(木) 12:00～20:00
11月25日(金) 10:00～20:00
11月26日(土) 10:00～20:00
(開催時間は変更になる場合があります)

開催場所 埼玉大学



むつめ祭常任委員会 委員長

吉田 優志さん Masashi YOSHIDA

教育学部社会専修3年
埼玉県立所沢北高等学校出身



地域のみなさまと埼玉大学の、
バランスの良い融合を目指して。

むつめ祭は、埼玉大生が主体となっていく、年に一度の大きなイベントです。常任委員会はおよそ1年かけて準備し、むつめ祭開催中は運営に駆け回ります。参加する団体は練習の成果を発表したり、模擬店で楽しんでもらったりなど、むつめ祭は多くの埼玉大生が和気あいあいと楽しむお祭りです。

しかしながら、埼玉大生がうちわで盛り上がっているだけではないかという意見が委員会内であがり、近年は地域との交流を深めることも重要なテーマとなっています。

地域のみなさまと埼玉大を結びつけることや、埼玉大生とかかわりを持てる機会となることも、むつめ祭の役目なのです。その意図が今回のテーマに表れています。<祭りはバランスよく>、老若男女を問わない地域のみなさまや近隣都県の高校生ともバランスよく交流を図り、来場された方にむつめ祭を楽しんでいただき、埼玉大学を知っていただきたい。そんな気持ちが込められているのです。

すべてが目玉企画、自信をもって
3日間みなさまをお迎えする。

昨年は2日間開催でしたが、今年は3日間に戻り、模擬店数も増えるなど全体の規模は拡大しています。新たな企画は、イルミネーションプロジェクト実行委員会の協力による、祭期中の構内ライトアップ、音楽系サークルとの連携でオープニングイベントの復活、声優『日岡なつみ』さんを招いてのトークショーの開催といったところです。また、近くの中学校の吹奏楽部と埼玉大吹奏楽部とのコラボコンサートも計画中です。

これら新企画に加え、地域のみなさまに好評のフリーマーケット、高校生に埼玉大のアカデミックな姿を見てもらう『むつめキャンパス』、毎年親子連れでにぎわう『こども

きかく』も行われ、すべてが目玉企画と自信をもって言える内容になっています。

来場された方には「来年も来るよ」と言っていたきたいですし、高校生には「埼玉大に入りたいな」と思ってもらえたらうれしく思います。もちろんむつめ祭に関わった埼玉大生に「楽しかった」と感じられるように、しっかりやり遂げたいと思います。

今年度、むつめ祭常任委員会は100名を超え、様々な企画を行うことができる体制となりました。今までのむつめ祭とはまた一味違うものが作ることができるように、委員一同励んでおります。多くの方のご来場お待ちしております。

第67回むつめ祭公式ホームページ
<http://mutsume.com/>



山口宏樹学長がノーベル賞受賞者・梶田隆章先生と対談



山口宏樹 埼玉大学長

2015年のノーベル物理学賞を受賞された東京大学梶田隆章宇宙線研究所長と山口宏樹埼玉大学長との対談が実現しました。二人はともに埼玉大学を卒業して東京大学大学院に進学、その後、それぞれ理学、工学の分野で研究者の道を歩んでいます。この二人が、次代を担う若手研究者育成の観点から、研究のこと、学生の流動性のこと、国立大学の役割、埼玉大学への期待を語ります。

詳しくは、埼玉大学ホームページをご覧ください。
http://www.saitama-u.ac.jp/news_archives/20160926-1-1.pdf



梶田隆章 宇宙線研究所長

たまたまニュートリノの異常に気付き方向転換。 若い人にチャンスあり!

山口 梶田先生のこれまでの講演会等のお話を伺っていると、偶然的要素がいろいろあるとのこと。その偶然的要素も含め、梶田先生の研究上のご経験から、これからの時代を担う若い研究者にメッセージがあればお願いしたいのですが。

梶田 若い研究者へメッセージを言える程の経験はありませんが、カミオカンデでは、最初は実験プロジェクトである陽子崩壊の探索に携わっていました。たまたまニュートリノの異常に気付き、当時、その問題を誰も気にしていなかったのですが、思い切ってそちらに方向転換できたことは良かったと感じています。今の年齢になって分かるのですが、もう自分では実験データを見ることはできない。ですから若い人達がいろんな目で実験データを見て何かを見つけざるを得ない。そういう意味では、若い人にこそチャンスがあると思っています。

社会がもっと余裕を持たないと! 研究における「遊び」と研究者の余裕。

山口 経団連が新たな社会や経済の実現には、一つに社会受容の壁の突破が不可欠であるとし、技術革新がいくらすぐけても、社会から受け容れられなければ社会変革はできない。学問は理系だけでなく文系も必要だとしています。この文系学問については、東大の吉見俊哉教授の著書「文系学部廃止」の衝撃(集英社新書、2016)によれば、大学の知、特に文系の知には、有用性だけではなく遊戯性が必要であるとのこと。この点について、私は理系の学問にとっても、間違いなく遊戯性が重要だと思っているのですが、梶田先生はどのように考えられますか。

梶田 いわゆる「遊び」の部分が無い限り、世の中、うまく進んでいかない。今はあまりにも効率重視のため、非常に生きにくい世の中。長い目で見たとき、健全な発展に繋がらないのではと思っています。私の場合、「遊び心」と言うよりも余裕を持っていたと思います。一生懸命研究をやっているけれど、精神は余裕を持っていたといった具合に。

学生の流動性は重要! 東大大学院に入った時は違うものを感じた。

梶田 あるところで場所を変えるのは重要だと思います。やはり東大大学院に入った時は違うものを感じました。

山口 私も埼大から東大大学院に行ったことで世界が広がりました。当時は本州四国連絡橋プロジェクトがあり、東大土木に橋梁研究室があつてそこに進学したんです。その結果、埼大に戻ってからもネットワークに入り込むことができています。一カ所に留まっていたら絶対できないことですし、そういう意味でも流動性は重要ですね。

日本はもっと理系ドクターを輩出すべき。 だから国立大学が頑張る!

山口 国立大学協会では今、今後の高等教育がどうあるべきかの議論をしています。国立大学は研究をベースに人材育成ができることが強みであり、それをミッションとして存在意義を示していくべきと考えますが、梶田先生はいかがですか。

梶田 私もそう思います。特に理系の場合、研究を通して人材育成をしようとする、どうしても国立大学がやらざるを得ないのが現状。研究者になるかは別として、理系の人材育成は今後、もっと必要になる、ならなければいけないはずで、日本はもっとドクターを輩出すべきだと思う。だから、国立大学が頑張らざるを得ない状況なんです。日本ではドクターの数は間違いなく減っているという、非常におかしなことが起こっていますよね。世界の認識と全く反対のことが起きている。

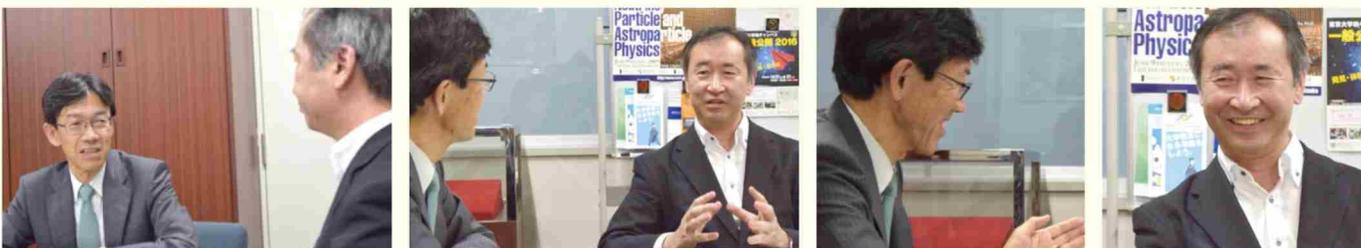
埼玉大学へのエールは「研究面で若い人を引きつけよ!」

山口 学長となった私には、母校は輝いて欲しいという強い思いがあります。梶田先生の経験からして、埼玉大学の今後の振る舞い方について、何でも良いのでサジェスチョンいただければ嬉しいです。

梶田 たぶん、研究という側面で若い人を引きつけるとなると、ある程度周りから見える、ある研究集団が必要だと思います。それを全分野でやることは不可能だと思いますので、なるべく、その見える部分を作っていくことが必要かと思います。

山口 ある国立大学の学長が、大学受験の際、埼玉大の生物系の研究を見て「この研究、面白そうだから埼玉大もいいな」と本気で思った、そういうことが増えれば良いと話されていました。レアケースであるものの、そういうふうに向けるのは一つの戦略ですよ。

梶田 おそらく、大学に入る時にそこまで見るのはレアケースですが、大学院とか、ポスドクとかに上がっていくにつれて、本当に研究を見るようになってくるので、そこで学生を集められる大学にするか、ということだと思います。



(2016年9月26日、東京大学宇宙線研究所の所長室にて)

◆ Information & News ◆

平成29年度 埼玉大学学生募集要項等を配布しています

◆携帯電話から請求する

QRコードを読み取ってアクセスしてください。



テレメール



大学情報センター
モバっちょ

◆携帯電話から請求する

<http://www.saitama-u.ac.jp/entrance/reqmaterial.html>

◆埼玉大学に来学して受け取る

埼玉大学学務部入試課(教育機構棟1階)で受け取ることができます。

月曜～金曜(祝日等を除く)9:00～17:00

※守衛所(埼玉大学正門わき)では、上記の曜日・時間以外にもお渡しできます。

入試に関するお問い合わせ 埼玉大学アドミッションセンター 電話 **048-858-3036**

学生センターを開設しました

平成28年9月15日、全学講義棟1号館1階に「学生センター」を開設しました。学生センターでは、学生に関する事務を所掌する係(各研究科・学部支援室学部係、国際室、学生支援課、教育企画課の一部)を1か所に集め、学生へのワンストップサービスを提供していきます。



第13回 埼玉大学イルミネーション ～光で紡ぐ大きな輪～

12月5日
～25日

今年も学生たちによる手作りイルミネーションが学内を彩り、地域の方々との交流を深めていきます。心温まるイルミネーションを見にキャンパスに足を運んでみませんか。



点灯式

12月5日(月) 18時～

地域交流イベント

12月17日(土) 15時～

ラストナイト

12月25日(日) 16時30分～

会場

埼玉大学構内、埼大前公園

詳細は埼玉大学イルミネーションプロジェクト実行委員会HPをご覧ください。

<http://saidairumi.s344.xrea.com/>

埼玉大学広報誌
「Saidai Concierge」
Vol. 24

アンケートのお願い

今後のより良い広報誌づくりのため、皆様のご意見をお聞かせください。



Saidai Concierge vol.24 平成28年11月発行

■企画・編集発行 埼玉大学広報渉外室
■企画・制作 コスモプリント(株)
■問い合わせ先 埼玉大学広報渉外室
〒338-8570 さいたま市桜区下大久保255
TEL 048-858-3932 FAX 048-858-9057
E-mail koho@gr.saitama-u.ac.jp
URL <http://www.saitama-u.ac.jp>



この冊子に関するご意見やご質問は、埼玉大学広報渉外室までお寄せください。